

重度・重複障害幼児の集団療育（3）

—健全児きょうだいの発達課題*—

後藤秀爾¹⁾ 鈴木靖恵²⁾ 佐藤昌子³⁾
村上英治 水野博文⁴⁾ 小島好子⁵⁾

この子どもたちをもった家庭は、笑いが一杯なければいけない。兄弟姉妹が、陰気になることがおそろしいのである。
— 福井達雨 “子供に生き
され子供を生きる” より

I 問題の所在

名古屋大学臨床心理相談室において、発達障害児の集団療育活動を始めて12年目になる。その経過の中で、諸種の現実的な要請から、特に障害を持たない療育対象児をきょうだいに持った健全児をも受け容れて、集団療育活動を構成していかねばならない事態も再三生じてきた。幼稚園、保育園等の就園以前のきょうだいは、日常の活動の折にも、対象の障害児について参加して来ていたし、また行事活動の折には、就園、就学しているきょうだいも、参加して来たという実情がある。

そうしたきょうだいを含めての活動を行なううちに、私どもの中にも、たとえば、健全児きょうだいが、障害児の行動のモデルになったり、また動きのない重度の障害児ばかりの中では、健全児きょうだいの動きがグルー

プの雰囲気を活気づけたりするという、肯定的な側面への認識が高まり、特に重度重複の障害児を療育対象とするようになったこの数年来は、積極的に健全児きょうだいをも療育の場に受け容れ、その発達援助をも視点に含めながら活動を行なうようになった。そうした統合療育の方向性を意識しての集団構成について、私ども療育者間で相互に検討し、確認しあってきた狙いは、およそ次の3点にまとめられる。

(i) 重度児ばかりのグループの動きに活気を与え、療育者と障害児を含めたメンバー間のダイナミックスの展開を刺激すること。

(ii) 健全児きょうだいにおいては、障害児への理解を深め、障害児を受け容れ、障害児をきょうだいに持った自分の状況を受け容れる為の一環とすること。

(iii) 母親においては、単に障害児のみならず、障害児を持った家族全体へのアプローチを意図しているという、療育グループの姿勢を理解してもらうきっかけにすること。

基本的な視点としては、こうして私どもの中でもかなり整理され、明確化されてきているものの、現段階では、そうした障害児をきょうだいに持った健全児に対して、どういった療育課題を設定してかかわることが必要であるのか、その発達の視点を十分に明確化できないままになっているとの感が強い。

従来からも、そうした健全児きょうだいへの配慮の必要性を指摘した研究はいくつか拾いあげることができるが（例えば、浅賀，1967，小宮山，1967，西村，1979な

* 本論文の要旨は、東海心理学会第31回大会で発表した。本研究をすすめるにあたって、私どもの療育グループには、上記以外に、松永夕香里（日立製作所）・藤田恵美子（広島市総合相談センター）の両名が、まったく同様に参加し、協力してくれたことを付記し、謝意を表すものである。

- 1) 愛知学泉女子短期大学講師
- 2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期）
- 3) (旧姓深谷) 東京都職業適性相談所
- 4) 社会福祉集団はちのす
- 5) (旧姓柳沢) 名東ワークス

重度・重複障害幼児の集団療育（3）

表1 療育対象児（障害児）の概要

（S. 56. 5 現在）

障害児名	家族構成	障 害
サユリ	<p>(30歳) サユリ (3歳7ヶ月) (30歳) アカリ (10ヶ月)</p>	<p>てんかん発作による発達遅滞。3歳時より、てんかん発作が始まり、発達の障害が明らかになった。その後も現在に至るまで、1日に約1回の割合で小発作が続いている。発達の水準は、おおむね平均して6ヶ月程度。四つんばいのいざりで移動し、現在歩行訓練中。バランスや見通しが悪いにもかかわらず、よく動きまわるので目が離せない。社会性の遅れが著しく、对人的刺激に対する反応性が乏しい。</p>
ユリコ	<p>(42歳) ユリコ (7歳3ヶ月) (37歳) タケシ (6歳3ヶ月) ミユキ (11ヶ月)</p>	<p>脳性マヒ。レノックス型のでんかん。細かなけいれん発作が頻発しており、抗けいれん剤でも抑えきることができない。発達水準は、3～5ヶ月程度。了解不能の啼泣が、しばしば認められ、笑っていたかと思うと、突然悲しげに泣き出したりする。外的刺激に対して、ほとんど反応していない。内発的な変化に応じて、表情の変化が、認められるようだと、母親は話している。時折、寝た姿勢から、自力で起き上がり、座位をとることができるが、全身が弛緩しており、不安定である。</p>
タカヒロ	<p>(32歳) タカヒロ (3歳11ヶ月) (30歳) ユウスケ (1歳8ヶ月) (4ヶ月)</p>	<p>脳性マヒ。全身に強い緊張がある。発達水準は1ヶ月から3ヶ月。脳性マヒによる緊張のため、身体の自由は殆んどきかず、首の座りも不安定。情緒面では、比較的よく発達しており、对人的反応性も高い。人の動きを見て笑ったり、人との別れに際して泣いたりする。</p>
レイコ	<p>(32歳) レイコ (5歳8ヶ月) (32歳) ミエ (4歳1ヶ月) (1ヶ月)</p>	<p>小頭症。発達水準は、6～10ヶ月。移動は、四つんばいのいざりで、歩行訓練中。外界の了解が比較的よく、自分の担当の療育者を他の療育者から区別できたり、シール貼りなどの設定課題も楽しめる。「ママ」「パパ」「ヨイショ」と不明瞭だが言葉も見られる。</p>
リカ	<p>(41歳) マサユキ (9歳9ヶ月) (37歳) リカ (6歳)</p>	<p>脳性マヒ。出産時脊髄破裂が認められ、胎生期初期に原因があると言われている。てんかんの小発作が時折見られる。全くの寝たきり状態。来所し始めた頃（4歳頃）は、反応性も未熟、未分化で、首も座っていなかった。その頃に比べ、表情が少しずつ豊かになり、母親に抱かれると笑うようになった。音刺激に対しては、その方を向くなど、反応性も高くなってきた。発達水準は、おおむね2ヶ月程度。</p>

ど)その心理社会的発達過程の特性を示し、発達援助のための方向性を明確化したものではない。

ただはっきりしていることは、障害児を持った母親にとって、その健常児きょうだいもやはり、まぎれもない我が子であり、従って、障害児をきょうだいに持った子を、どうすれば“まっすぐに”育てることができるのかということは、母親の意識の中では、きわめて重要な問題とならざるを得ないという事実である。そうした意味において、健常児きょうだいへの発達援助のあり方を明確化することは、家族全体への援助の視点から考えた時にも、重要な柱とされるべきである。

こうした視点から、今回ここでの検討課題となるのは健常児きょうだいを含んでの集団療育のあり方を評価しなおすこととあわせて、健常児きょうだいの発達課題を明確化して、その発達援助のためのプロセスを検討する視点を作ることである。

II 対象児と検討の方法

1 対象児の概要

今回検討の対象としたのは、昭和56年度の療育に参加してきた5名の障害児のきょうだい8名のうち、生後半年以下の2名を除いた6名である。そのうち4名は、週1回3時間の日常療育活動にも加わっており、残り2名は、昭和56年度現在小学生であり、夏の海水浴、クリスマス会、お別れ会等の行事の折のみに参加している。表1に示したのは、その家族構成ときょうだいの障害内容の概要である。

2 母親への面接調査

昭和56年度の療育終了間近の2月段階に、母親に対し短時間の個別面接を、毎週ルティーンของกลุ่ม面接時間の他に時間をとって行ない、特に健常児きょうだいの療育参加をめぐる母親の意識や感想を聴取した。面接にあたっては、基本的な質問項目を設定し、その項目に関連して感じたことを、母親に比較的自由に話してもらおうよう配慮した。この面接は主として、子供の療育の担当者の1名(佐藤,旧姓深谷)があたった。面接時の質問項目は、おおよそ表2に示したごとくである。こうした、きょうだい療育に対する母親の目からの評価を検討することによって、きょうだい療育の意義を明確化し、その問題点を抽出していくことができよう。さらに、そこで得られた情報を次に記す療育経過と併せて検討する中で、健常児きょうだいの直面している心理的発達課題を提示したいと思う。

表2 母親面接の質問内容

1. きょうだいたちは〇〇ちゃんと、どのようにしてかわっていますか。また、〇〇ちゃんのことを、どのように思っていますか。
2. 障害児のきょうだいという特殊な条件にある、きょうだいたちを育てるにあたって、お母さん方は、どのような点に、一番気をつけておられますか。
3. きょうだい(たち)は、毎回(あるいは、度々)、グループに参加することを、どのように感じていると思われますか。また、きょうだい(たち)は、グループでどんな影響を受けたと思われますか。
4. きょうだい(たち)を、グループに参加させることについて、お母さん自身は、どのように考えておられますか。

3 療育経過の検討

本年度の療育開始当時、障害児5人に、それぞれ主たる療育担当者がひとりずつつき、さらに、きょうだいへの対応と、全体のまとめ役とを兼ねて、今ひとりの療育者が加わっている。その他に生後10ヶ月のアカリ、11ヶ月のミユキ、1歳8ヶ月のユウスケ、4歳1ヶ月のミエの4人が、毎週の療育活動に参加することになった。先の3人については、昭和56年度の1年間の経過を、ミエについては、その前年度からの経過を検討する中で、それぞれの時期の心理的課題を明らかにしていきたい。また、小学校1年のタケシ、小学校4年のマサユキについては、主として家庭での状況に、行事の折の行動観察をあわせて検討するものとする。

III 面接結果と療育経過

1 きょうだい療育の評価について

母親面接の中で、健常児きょうだいを療育グループに参加させることについての意見を求めた結果をまとめたものが、表3である。5人の母親すべてが、それぞれにグループの雰囲気はよくなるし、自然な感じでよいとして、肯定的に受け止めている。また、他の相談機関ではきょうだいを連れて行くことで迷惑がられたり、障害児のことばかりしか考えてくれないのに対して、きょうだいを安心して連れて来れることの意義を指摘する意見も、2人の母親から出されている。さらに、きょうだい自身にとっても、毎週あるいは、年に数回であっても、自分のきょうだい以外の障害児に接して、自分のきょうだいを見直す機会の作られたことを評価する意見も多かった。

表3 健常児きょうだいをグループに参加させることについての母親の意識（総数5，重複あり）

母親の意見の内容	人数
いろいろな障害児がいて、頑張っていることを自然な雰囲気の中で、自分の子に見せることができる。	4
健常児が入ると、グループ全体の雰囲気がよくなる。	5
いつも手がかけられないので、グループで一緒に遊んでもらいたい。	1

さらに、年少児の場合、日頃親が手をかけてやれない分、遊んでもらえてよかったとする意見もあった。

ちなみに、母親たちの健常児きょうだいを養育する上での留意点をあわせて聞いたところ、やはり、幼少期には、あまり手をかけてやれないでいることが大きな問題として意識されているし、また、ある程度年長になった段階では、障害児のきょうだいが居ることにこだわらない、障害児を馬鹿にしたりしない、重荷に感じないようになどの配慮に心を砕いていることが表明されている。そうした母親の問題意識に答えることが、きょうだいを含めた形ですすめていく場合の療育活動には、要請されてくると受け止めなければならないだろう。

健常児きょうだい自身が、グループに参加することをどのように受け止めていたかを、母親に尋ねた結果が表4に示したものである。毎週参加の年少児の場合、特に分離不安の高かったアカリを除いては、グループに参加することを楽しみにしているとの報告が得られている。そのほとんどが、遊んでもらえるのを楽しみにしているということである。また小学生の2人は、特に反応をし

表4 健常児きょうだいが、グループに参加することを母親は、どのように受けとめているか

対象児	健常児きょうだいの様子
アカリ	母子分離が、まだできていない。緊張している。
ミュキ	楽しんでいる。
ユウスケ	楽しんでいる。
ミエ	楽しんでいる。
タケシ	参加する事については、楽しいとも、嫌だとも言わない。
マサユキ	タケシと同様、何も言わない。しかし、自分から進んで来る。

ていないが、共に母親がきょうだい自身の判断にまかせて来所させているという状況の下で、ここ以外の活動よりも当所での行事を選んで来ていることもあったとかで、総体として、きょうだい自身肯定的に療育への参加を受け止めているといえよう。

それも、たとえばマサユキの場合、“始めの頃は「気持ち悪い子がいるね」とびっくりした感じ”だったが、その後、そうしたことは言わなくなって、“今では楽しんでいるようだ”と報告されたように、一定の過程を経て、障害児の居るグループが、自然なものとして肯定的に健常児きょうだいの中で受け止められるようになっていくものとも理解される。このマサユキが、障害児きょうだいのリカに、やさしい思いやりを示しているのを、母親は心暖まる思いで見ているこの頃であるが、障害児と接する中で生じてくるそうした肯定的側面は、基本的に、障害児きょうだいと共に楽しむ体験を通して獲得されてくるものと考えられる。

またさらに、母親自身の安定、頑張り、そうした母親に接する健常児きょうだいの健全な発達に不可欠の条件であることを指摘する意見も2名から出され、当然のことながら、健常児きょうだいへのアプローチも、その子たちをとりまく全体的な対人状況への視点を持つことの必要性も指摘されるべきことが思い起こされた。

2 健常児きょうだいひとりひとりの経過

a) アカリの場合

サユリの妹アカリが、療育に参加してきたのは、生後10ヶ月から1歳8ヶ月までの10ヶ月間である。歩き始めの頃に、初めて療育グループに入ってきたのであるが、始めから新奇場面に抵抗を示し、母親と離れられないでいる。何かの折に母親が離れると泣いてしまい、療育者が誘いかけても無言のまましかめ面で母親にくっついていう状態である。ほとんど半年間は、そうした状態で母子分離ができない。その間に、主たる担当児を定めないうち療育者のひとり（小島）が、このアカリとの関係づけをはかるようにして、10月頃から、その療育者小島に抱かれて少しずつ母親と分離できるようになり、母親の方を時々確認しながらも、表情も柔かく、遊戯室内の遊びに参加するようになってくる。同年齢の他の健常児きょうだいに働きかけられると、療育者小島を交えて、遊具を使って一緒に遊べるようになっていく。最後の方では、ほとんど母親と離れて、他の健常児と遊んでいるが、十分に楽しんで、のびのびしているというにはまだしもの感がある。

このアカリにおける家庭でのサユリとの関係を聞くと、サユリが泣くと頭をなでたり、顔をのぞき込んだりして、

幼いながらもそれなりにサユリのことを気にかけているとのことである。母親がサユリにかかりきりになることについて、すでに生後半を過ぎる頃から、あきらめの目で見ているようで、ひとり遊びが多いことを母親は感じている。父親が家にいる時は、甘えが顕著になることから、日頃相手をしてやれないことを“かわいそう”に思っているという母親である。

b) ミユキの場合

ユリコの妹ミユキは、ユリコの3年間に渡る療育経過の途中で、生まれてきた。昨、昭和55年度は、まだ生後半にも満たないうちから療育の場へは来ており、時々手のすいた療育者に抱かれては、活動の中にも入っていた。本年度の療育開始時には、11ヶ月になっていたが、その時から特に人見知りするわけでもなく、遊戯室内で遊んでいる。ちょっとした状態の変化があると、母親にくっつきに行くが、大部分の時間、母親から離れて活発に遊んでいる。7月頃からは、特に療育者の顔を覚えて、さかんに声を出し、注意を引こうとする動きも見られる。12月頃からは、療育者の顔色をうかがい、相手になってもらおうとする動きが出てきている。また指しゃぶりが目につくようになってきた。

家庭におけるミユキは、母親の真似をしてよくユリコの世話をやいているとのことである。ミルクを飲ませようとしたり、ヨダレをふこうとしたり、時には抱こうとしたり、ユリコが泣くと、母親に知らせに来たりする一方、母親にまつわりつくことも多いということである。

c) ユウスケの場合

タカヒロの弟ユウスケは、本年度の5月より参加してきている。当時1歳8ヶ月である。諸種の事情により、前半は3回に2回は休んでおり、続けて参加してくるようになったのは、ほとんど11月に入ってからである。はじめのうち、人見知りもなく、活発に遊んだり、タカヒロを気にして、大きな声で名前を呼んでは側に行こうとしたりした。しかしその後、じきに人見知り反応を示すようになり、働きかけられると、すぐに母親を捜してくっつきに行く。それでも少しずつ場にも慣れ、後半元気に遊ぶことができるようになっていった。

家庭では、タカヒロが泣くと母親に“ごはん欲しいって”と知らせに行ったり、お菓子を食べさせてやったり、世話をやいているようである。遊ぶ時も、タカヒロと一緒に遊ぼうと働きかける一方、同じように世話をしてもらいたがって、ダダをこねることもあると聞く。

d) ミエの場合

レイコの妹ミエは、昨年度より、3歳1ヶ月で参加してきており、今年度の3月で4歳11ヶ月になる。初参加の時から、ひとりの男性療育者（水野）になつき、遊ん

でもらって楽しんでいる。当時参加していた2歳児のマリとその後いつも一緒に遊ぶようになり、ケンカをしてはよくミエの方が泣かされていた。10月過ぎる頃からは、よくお手伝いをするようになり、ケンカをしても我慢しようとしているが、結局泣いてしまうことが多い。それでも次第に泣くことは少なくなり、他児へも気を遣うようすが出てきて、お姉さんらしくなる一方、反抗的で扱いにくい面も示されてきた。昭和56年度は、前半母親の第三子出産のため休んでいたが、9月にふたたび参加してきた時は、小さい子の世話をやいたり、ユウスケをリードしてお母さんごっこをしたりする一方、手のあいている療育者に甘えたりすることもある。次第に、“甘えたい”気持ちと“しっかりしなくては”という気持ちの揺れ動きが大きくなってきたのか、ちょっとしたことで、泣いたり、ぐずったりすることも多くみられる一方、よく療育者を手伝ってくれたりする。年長児と同じようにやりたがるが、やはりそれほどうまくできなくて、しょんぼりしたりすることもある。

家庭でのミエは、“レイちゃん病気でかわいそう”、“歩けるといいね”とそれなりにレイコのことを気にしている様子が見られる。よその人が居ると、レイコをかばうような動きも見せたりする一方、“レイちゃんは甘えられるからいいね”とやきもちを焼くこともあるようだが、強くは要求を出してこないとのこと。近所の見知らぬ人に、“私のお姉ちゃん歩けないの”と話したりして、レイコの障害についても比較的自然的に受け容れているようでもある。

e) タケシの場合

ユリコの弟タケシは、昭和54年度から、行事の折には参加してきており、今年度が3年目である。今年度は3回程、療育グループにも顔を出し、皆の前で照れながらハーモニカを吹いたりしている。皆の注意を引きたいのか、ことさら集団からはずれたり、知らん顔してみたり、必要以上にふざけたりしているが、自由遊びの時には他児とよく遊んでいる。

そうしたタケシに対する母親の見方としては、次のようなことが語られている。小さい時には、かわいそうなくらいに、ユリコのことを気にして、そばに寄って世話をしていたが、2歳ぐらいからは、もう一緒に遊ばなくなっている。しばらく前に友達が出来た時、ユリコのことを、“よそからあずかっている子”と説明したりしたこともあったが、今では、平気で友達を家にも連れてきている。ユリコを見られることも何とも思っていないみたいで、空気のような存在らしい。ただ、時には、やきもちなのか、母親と一緒に寝たがることもある。タケシの中で、どういうユリコのイメージができているのか、母親

にも判らなくなることが多いとのことである。

f) マサユキの場合

リカの兄マサユキも、この3年間、行事の折のみに参加してきた。現在小学4年生である。今年度の海水浴、クリスマス会、お別れ会などの折にも、楽しんで参加してきて、率先して集団活動を行なっている。自らタテ笛を持参し、積極的に演奏をきかせてくれたり、他児をリードして療育者の手伝いをしたりしてくれている。

家では、リカのことを、動けなくて可哀想といっは、すごく可愛がっているという。母親も、この兄にリカのことを無理に面倒見させないように配慮し、兄は兄、リカはリカとはっきり区別するように接してきているとのことであるが、リカに対する自然な心配りのできるやさしい子であるという。“名大には変な子がいるね”とは言っているが、リカのことは、“変な子”とは思っていない様子である。

IV まとめと考察

1 障害児とのきょうだい関係について

健常児きょうだいが、その障害を持ったきょうだいとの関係の中で、それなりの適応の道を見出そうとする際、私どもの従来の経験からしてかなり共通のパターンがみられるように思われる。それはとりわけ、障害児よりも遅れて出生した弟や妹の場合において顕著であり、そのことはおそらく、乳児期から幼児期前半にかけての問題から派生しているであろう。

障害児きょうだいが多動であったり、その障害が重度であったりすれば、母親の物理的接触時間は、健常児きょうだいには多くが向けられず、母親の注意も離れがちとなる。たしかに十分な母性的接触は受けられないでいるし、ウイニコットの指摘する絶対的依存（Winnicott, 1965）の時期に、母からの愛情の独占体験は得られ難いといえよう。しかしながら、そうした状態において母性的接触の剥奪（いわゆるBowlby, 1969のいうような）という程の深刻な事態が生じにくいのは、第1には、母親の期待や、将来への希望が、障害児において叶えられなかった分までも、当の健常児きょうだいに向けられてくるからである。さらに第2に、十分相手になってやれなくて申し訳ないといった母親から補償的に密接な接触がたとえ短時間であっても受けられるという型で、それなりの母性とのつながりは保たれていくからであると考えられる。ユリコの母親や、レイコの母親、タカヒロの母親が、みなそれぞれに下の子を生むにあたっての心境を語って、“自分にも健康な子が生めることの確認”の意味を指摘し、また家庭づくりの“夢”“希望”の手がかりでもあることを述べている。一方で母の手がかけられ

ないで申し訳ない、せめて障害児のことのできるだけ負担をかけないようにしてやりたいとの配慮も、どの母親にも共通のものとして語られてきた。いってみれば、人一倍の期待と配慮を受けつつ、人一倍の重荷を背負っての発達を余儀なくされるという事態の中に居るものといっただろう。

そうした状況下で、母親との間にアタッチメントは形成されるし、行動のモデリングも生じてくる。そして1歳前後から、母親のするように、障害児きょうだいの世話をやいたり可愛がったりすることで、多くの子どもは母親の肯定的反応の得られることを体験し、そうした行動を身につけていくようである。それは子どもなりに、先に述べた状況下で身につけた適応の手段であるともいえよう。障害をもったきょうだいは、絶対的にケアを受けるべき存在であることの確認の動きといっただろう。

そして、1歳半から2歳代にかけては、従来の経験から考えても、ほとんど例外なく大部分の健常児きょうだいは、かなり強い分離不安を示し、母親から離れられなくなる時期を経過することになる。それはちょうど、マラーの指摘する再接近危機の時期にあたり、母子関係の再確認の時期ということできよう。（Mahler, 1975）通常の場合よりも、この母子関係の再確認の必要性は、障害児をきょうだいに持つ子どもの場合、さらに重要なものとなっているものと理解してよいだろう。

その段階で、子どもたちは、おそらく十分に納得できるような形で母子関係の再確認をするのではなく、むしろ友だち関係の方へ目が向けられることによって、中途半端のまま母親からの分離・独立への志向性を強めていくことで、その時期を通過していくことが多いように見受けられる。その時期の課題を十分に乗り越えて処理できているわけではないので、それは次に持ち越されて、結果的に他者の評価を必要以上に意識して、いわゆる“いい子”としてふるまうことが多かったり、やんちゃを言って注意を集めようとする動きが目についたりすることも多々生じてきたりする。自分のきょうだいが障害児である、あるいはもっと漠然と普通とは違っていることの認識はでき、友だちとの関係をも一方で配慮するため、まさに自分のきょうだいである障害児を、自分と自分ととりまく家族外の社会との関係において、どう位置づけ、それに基づいて自分がどうふるまうべきであるかが、揺れ動いたりしているようでもある。ある時は、きょうだいとのつながりを否定したり、逆に世話役を演ずることによって、自分の対社会的な位置づけを見出したりするように思われる。幼児期段階では、多かれ少なかれ、周囲のおとなたち、友だちの目を意識し、そちらに方向づけられて

の行動決定、役割選択となっている可能性が高い。

学童期には、さらに広く社会的関係の中で自分とその家族を位置づけることができるようになってくる。父親母親の態度を、同一化の対象とし、取り入れるようになる時期でもあり、障害児に対する両親の受け止めかたが子どもたちの態度をも左右しているように思われる。

ともあれ、こうした発達のみざまな段階を通して、一貫して言えることは、障害児をきょうだいに持つことは、通常の発達に比べて、ひとつ余分な心理的課題を背負うことになるということである。それは当の健常児きょうだいの発達にとって、決して不利なことでも否定的な面ばかりでもない、むしろそうした課題的状况を乗り越えるところに、人間としてより豊かな発達を期待できるという側面がある。障害児と日頃接することにより、自然に、社会的弱者を受け容れ、その心の動きに触れることができ、人の痛みや弱い所にも目を向け配慮できるような、心豊かな人間に育つことができるというのは、いわば統合保育、統合教育の理念でもある。その点は、きょうだいの場合にも同様のこととして指摘することができる。この問題は、そうした視点からこそ検討されるべき問題であることを、ここで確認し、次のきょうだい療育の視点とあり方へと論をすすめたい。

2 健常児きょうだいの発達課題と療育のあり方

前述したような認識に基づいて、ここで、障害児をきょうだいに持った健常児の発達課題というべきものを、まとめて提示したいと思う。いわば対象関係の発達過程からの段階区分をここでは視点とし、とりあえず、今回ある程度検討し得た学童期までの過程を問題とする。

表5に示したものが、私どもの考える発達課題についての試案である。きょうだい療育の場で同じように示されてくる母子分離不安も、母親への愛着行動の流れの中でとらえるべき場合と、母子関係の再確認という文脈でとらえられる場合とでは、基本的な配慮が異なってくるものである。どちらの場合も、完全な母親代理となり得るわけではないのだが、ともかくも療育場面においては、前者の場合、特定の依存対象が保障されることによって不安を処理することが可能になってくるし、後者の場合は、本来の母親との関係を確認することが不可欠の要素であると考えられる。したがって、子どもの直面している課題の基本的文脈をまずとらえることは、療育の主題とあり方を検討する上で必須の作業であるといえる。

表5にもとづいて、今少し具体的な療育指針を次に考えてみたい。およそ1歳半位までの段階の健常児きょうだいにとって、母親以外のおとなから、十分に可愛がられて、かなりの深い水準でのポジティブな情緒的交流の

表5 障害児をきょうだいに持った健常児の発達課題

通常の発達段階	概当年齢	きょうだいが障害児であるため生ずる心理的課題
自己像の基礎が、でき始めるまでの段階	およそ1歳半まで	<ul style="list-style-type: none"> ・きょうだいが障害児であることは、意識されない。 ・とりわけ母親をはじめとして、周囲の年長者の意識とケアが、障害児きょうだいに集中せざるを得ない状況の中で、自分が愛され、手をかけてもらえる存在であることの実感を得ることが必要。
自己像の獲得と自立性の確立までの段階	およそ1歳半から3歳まで	<ul style="list-style-type: none"> ・きょうだいが、障害児であるとの認識は、漠然とでき始める。 ・情緒的にも不安定で、母子関係の再確認が必要な段階であるため、障害児きょうだいの存在が、自分にとって、デメリットとはならないことの実感を得ることが必要。きょうだいとは独立の存在としての自己を認識することを通して、そのことが可能となる。
自・他の分化が進み、他者の評価を意識する段階	およそ3歳から6歳まで	<ul style="list-style-type: none"> ・障害児をきょうだいに持った自分の立場を認識することにより、そうした状況に適応しようとする。 ・そうした努力の中で、自分にとっての障害児きょうだいの存在の肯定的側面と否定的側面を認識し、両価的感情を整理していくことが課題となる。
家庭から離れて、友だち関係を展開させていく段階	学童期	<ul style="list-style-type: none"> ・障害をもったきょうだいと、そうしたきょうだいを持った自分の立場の理解と受容がすすめられることが、可能であり、かつ必要な段階。両者は、運命共同体ではないとの認識を、積極的に伝えられることが、そうした展開を可能にする。

体験が得られることは、意味のあることである。母親のみへのしがみつきから、多少なりとも解放され、他者から愛されるに足る自己のイメージが、醸成されることになる。そのことは、母親的接触の対象を、できるだけ増やすという意味ではなく、母親以外の他者との深い交流の可能性に、子どもが気付くことが大切な視点である。ある程度の母子関係が基礎として確立していれば、その不十分な部分を、ある程度カバーしていくことが可能となる。

およそ1歳半から3歳にかけての子どもは、障害児きょうだいを持っていないくても、きわめて不安定で、危機的状況に立たされているといえる。この時期には、母親から分離して遊べたり、分離不安が強くなったりする事態が、交錯して起こってきても、不自然ではない。むしろ母子関係の再確認のために、本来の母親への接近と甘えを許容し、それを援助してやる方向性で考えることが生産的であるとの印象を持っている。その一方で、母親から分離して、外界への探索活動を積極的に展開し、外界操作の自信と実感を身につけていくような動きも生じてくるのが期待できる時期でもあり、その両面での揺れ動きをうまくつかまえて、それに応じていく配慮が肝要であろう。

その後、第1反抗期を経て、他者から見られる自己を意識できる段階にかけては、自分の悩みの源泉の大きなひとつである障害児の存在に対して、両価的な感情が示されるようになってくることが多い。まわりの対応の中では、自然に、否定的な感情の方を抑えこみ、肯定的な部分ばかりを強調しようとする動きになっていく。そのことは、子どもの中では内部矛盾となって、葛藤を生じさせやすい。

子どもの中に生ずる自然な両価的感情を、どちらも等価に受け容れていき、子どもが障害児に対する否定的感情も、肯定的感情も共に表出できるような場を保障してやるべきである。子どもは、そうした気持ちの揺れ動き、葛藤の中で、まわりのおとなたち、あるいは両親の態度をモデルとして、次第にその問題を整理していくことが可能となってくるだろう。

そして学童期に入れば、友だちが障害児きょうだいをどう見るか、さらには社会の中での障害児きょうだいの位置づけが意識されはじめ、また新たに葛藤状態が生ずることになってくる。その状態を子どもなりに処理して、障害児きょうだいを自然に、なおかつ肯定的に受け容れるためには、両親や身近なおとなの障害児に対する態度の取り入れに期待する一方で、それ以前に、障害児とごく自然にきょうだいとして睦み合うという体験が重要であるように思われる。そして、そういう場を積極的に作っ

ていくことは、私どもにとっても重要な活動の一環として位置づけられるべきである。

V 今後の課題として

障害児をきょうだいに持った子どもたちには、そうした状況下に生まれたが故にこそ、障害児を自然に受け容れ、障害児をめぐるさまざまな問題を偏見のない目で深く見詰め、そのことにも取り組めるような生き方をしていって欲しいと思う。それは、子どもたちの義務として背負わせるといった類のものではなく、自発的・主体的にそうした問題意識をも取り込んでの社会活動へと展開するのが、ごく自然のなりゆきであるとの思いを持っているからに他ならない。ごく自然な形で、障害児も同じ仲間であると感じられる仲間を増やしていく上での、それは大事なひとつのステップでもある。このことは、今後、統合療育、地域の中での療育といった問題へと展開していく上での、ささやかな一歩でもある。この問題に関しては、これまでも再三にわたり言及してきたところであり、これ以上の論述は避けるが、本論のまとめとして、次の一文を引用したいと思う。それは、重度の脳性マヒ児土谷康文くんの弟隆之くんの小学校4年生の時の作文である。隆之くんがその後、成長して、障害児のためのボランティア活動への道へ入っていったことは、ひとつの心強いモデルのようにも思われるのである。

ぼくには、手足の不自由な兄がいる。父も母も、大きい兄も、おじいちゃんもおばあちゃんも、家族みんなでみまもっている。

兄は自分の力では、なにもすることができないけど、がまんができる。強い人だなあと、思うことがある。

毎年、夏にやってくる夜店や、夏まつりは、母のつらい間だ。夜店の開かれる、すぐちかくにぼくの家があるので、母は、

「連れて行ってやりたいけど、あまり人がじろじろみるのでなあ、スターなみや」

と笑う。

「見られてもええやん。つれていったらうよ」

と、ぼくがさそう。

車椅子にのせてもらった兄は、喜んでわなげとか、花火とか、いろいろな店を見ていくと、おとなの中に指さして笑う人がいる。あるお母さんは、自分の子どもに、

「これこれ、そんなことやめとき、わるいことしたら、あないなんねんで」

と悪い見本のように言った。

「ちがう。兄ちゃんの、不自由なのは、悪いことし

たからやないで。生まれるときに、頭の中にできた、
けがのためや」

と、ぼくは大きな声で叫びたかった。

運動会の昼食のときにも、兄の方をみてくすくす
笑っている人がいた。それまで、母からおいしそう
に、おべんとうを食べさせてもらっていた兄の顔が
急に悲しそうになった。その顔を見て、ぼくも悲し
くなる。でも、ぼくたちは、すぐにおもしろい話を
する。

ぼくは、からだの不自由な兄が運どう会にきて、
おうえんしてくれるのが1ばんうれしい。何日もま
えから、「きっときてや、ぜったいきてや」と、たの
んでいた。兄は、ようご学校を休んで、ぼくのおう
えんにきてくれたのだ。

よその人がどんなに見ても、ぼくは、ゆうえんち
でも、百か店でも、えいがやレストランでも、兄と
いっしょにいきたい。

ぼくは、兄のたのしそうなかおを見ていると、自
分もたのしくなる。近じょの人や、しんせつな人が、
兄をはげましてやってくれたときは、とてもうれし
い。

「あんな人ばかりやったらええのにな」
と、思うときがある。

からだは不自由でも、兄のきれいな心は、ぼくた
ちよりすばらしいと思う。気もちよくみんなのあつ
まるところへ行けるような世の中が早くくるように、

ぼくたちは努力していきたいと思う。

(向野幾世著「おかあさんぼくが生まれてごめ
んなさい」より)

文 献

- 浅賀ふさ 1967 精神薄弱児の家庭と社会 精神薄弱児
研究, 107, 2—5.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss*. The Hogarth
Press (黒田実郎他訳 1976 母子関係の理論 岩
崎学術出版)
- 小宮山倭 1967 精神薄弱児をもつ家庭の諸問題 精神
薄弱児研究, 107, 6—13.
- 向野幾世 1978 おかあさん、ぼくが生まれてごめん
なさい サンケイ出版
- Mahler, M. S., Pine, F. & Bergman, A. 1975 *The
Psychological Birth of the Human Infant*. New
York: Basic Book Inc.(高橋雅士他訳 1981 乳幼
児の心理的誕生 黎明書房)
- 西村章次 1979 実践と発達の診断 ぶどう社
- Winnicott, D. W. 1965 *The Maturational Processes
and the Facilitating Environment*. The Hogarth
Press (牛島定信訳 1977 情緒発達の精神分析理
論 岩崎学術出版)

(1982年7月31日 受稿)

A GROUP-THERAPEUTIC PRACTICE WITH SEVERELY MULTIPLE-HANDICAPPED CHILDREN (3)

Developmental Tasks for Non-handicapped siblings

Shuji GOTOH, Yasue SUZUKI, Akiko SATOH, Eiji MURAKAMI, Hirofumi MIZUNO
and Yoshiko KOJIMA

Inviting non-handicapped children to group-therapeutic practices where their severely multiple-handicapped siblings are focus is a useful approach for them. Based on this assumption, this study examines developmental tasks for non-handicapped siblings in order for us to establish clear directions to give developmental supports to them. We also assume that their developmental tasks should be different from those of children with healthy brothers and sisters.

This study proposes a four-stage model of developmental tasks for children living with handicapped siblings.

- (1) A stage for constructing the basis of self image (0 through 1.5 years old); the children are not yet aware of the presence of their severely multiple-handicapped siblings. Lack of sufficient maternal care may make it difficult for them to feel mother's affection.
- (2) A stage for establishing independent self image (1.5 through 3 years old); they begin to be aware of the presence of their severely multiple-handicapped siblings. It becomes necessary for them to perceive selves different from their handicapped brothers and sisters.
- (3) A stage for differentiating selves from others and recognizing evaluations from other (3 through 6 years old); they notice the situation in which they live with severely multiple-handicapped siblings and try to adapt themselves to the situation. The task for them is to control the feelings toward their handicapped siblings.
- (4) A stage for paying attention to groups outside the family, and acquiring chumship (school age); it is necessary for them to understand and to accept their own situations that they were born to have severely multiple-handicapped siblings.